連歌隨腦祕傳集

伊地知文庫
文庫20
161

連歌髓脳傳

文庫20
161

伊地知氏書冊

連歌之髄脳秘伝集

夫発句の大事と申ハしきんきむ若干ありといへども外
のおもいれとして十三の切字よりおこすなりけれ
連歌ハ何様にも人の心に思ふ儘にすべし
脇の句のうち発句に数ふくんもなきに脇に数いて
付様の口伝なきまゝよりて発句に数いて新(アラ心)
脇ハ若しうれハ案分も先に向りなりへし
たとへハ梅ヶ枝桜の数々花うえ卯の花青梅
夏草秋風野分霧野分枯松風松の
枯の事也　但西方こゝの月の花を定めて付人
すハ脇にも付るかとの思いたすへし　宗祇の

[seal]

一 外よ能付くる事を知べし
名ゝ釈ゝ無之事をいへば 郭公 是ハうき鳥也と紀
少海おかしきと俗言云ひ有し郭の花やうききき
其の花是ハ称して心の付けたし根の句根の
句よりして発句を捨し能く有る事知べし
又新人笛りを根にすゝめるなり 但発句有
りやかしく新いかゝハ句しりれ也ニさき（栗ス）
座し発句あてんのみいりて第三よりて第り
云ひ付言き へハ
梅壺し兵を厨り水のかゞみ‹?›
あ河ちく稀ハ深草の砂法作 勝五

一 悲しき泣ていへ禄合法楽の時ハ新切座し 一大
事の口伝し発句よ涅槃の字を句の頭の初の字
よおくる年の始又ハ祝儀ニ或ハの字いかなる儀
とる是あて々知 是迄近退匠 是あて口伝有り
実正の習ひなし 第三ハ前句よ付たるいかれも
よせい名れ歌をする也

一 恋の句一一一句よいふるいよもんしんを持て捨す
する也し 恋ハ男の女を詠んし 恋死など傳し
恋絶ゆき抱ハ別かれとも 世あてかりしえハ一世
よ逢んと思ふこそ 恋の切実かれ 句出て哉し
恋焦がし かしてよ まに持りぬ成よ

ゆゝしんを申り合きしゝんよ待りゝ相よ習ひあ者
ハ道音を作ゝ高ゆ遠ゝ
海門とゝ今者ハゆゝ元ゝきゝや
見ハさゝんゝの連音ハ中ゝてハ神きゝるものをせん
とゝて人を待ハ勿体ゝ人ゝ待まゝてこゝをおとゝんを
申ゝる新宿よ入神しゝきゝ此神と云ハ老言
き問き相を上中下並ゝ人又ハ上後中後下後
常ゝ多き神ゝてさゝ今ゝ神ゝ数を常ゝ
ゝゝて新仕ゝ作ゝ申ゝ一種の元を花
のちゝ作ゝいゝ新ゝて者ゝ多しいゝゝ
上ゝのんを百男ゝゝて一句ゝ問ゝ

主釈みて元ゝ屋ゝゝ又やゝ作きぬゝ話を人ゝ
又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝの下ゝの句ゝ多ゝ意度
て拾ゝ所ゝゝ尺ゝ人ゝいゝゝゝ意のゝ方ゝれ
悪ゝゝゝき月ゝゝんゝ屋ゝゝいゝ悪ゝゝ
源ハ俗ゝゝゝ墨のゝ者ゝの神ハゝあゝ
うきハ者ゝ宜ゝゝきれゝ又種舞ゝ情ハ
ものゝゝゝぬゝよ定所ゝゝゝんゝ屋ゝゝいゝ
みゝゝハ歩をこゝて方ゝゝ世ゝ
思ゝんゝ屋ゝゝ今ゝ黄所
人のゝゝ源を新ハゝゝゝて
やゝゝ者て程ゝゝゝ彼句ハ一つの見一つの友

ル哉と注て人の体ハなすへし

一 待時ハ夕宵より明日ともんを重ねして恨情を
尽し是よりて恋ニ未足を付る上手の連歌
ニ称し其ハ時ハ戯なる新作の如く句の神を
付へし恋の添ハ涙川ニ立とふなし
大概ルよ寸りきの分ミと川
是の思ふ体の何を見し　寄船
是ハ恋なの添らし涙川着ハされ有し能くならず也
是迄日二句付けハ三句めニハならしいふたき句を付べし
まさへい
かまうみこ中や油の世うん

恋の句中ニハ寸まハ輪廻せん様ニて有へし

一 述懐の句ハ浮世を思ひみつ捨ぬをおもひとせう
有情ハいつも分れとなる夕露裾足を付ら
まゝの物と思つりかて物思ひ夕ハ夕暮しおかつ
付されとる横雲ニハ四方の山なる涙ル心を遣
尽し述懐ニ恋の心得を付事いなし是ハ入事
下されし　但昔の恋しきいふゆえを思こそ外様
うき絡々きといふ子細なし
捨なる身ハ思ひ庵ニ明暮れて
是ら恋句しといふ庵ニ明暮てといふ恋し　捨なる身ハ
述懐し思ひとりよ文字みて恋し　出たる一字

うて居れり恵心僧都よりの海の道
前の日よりして[illegible]
世を捨てすべきの人[illegible]
思へども世をすむものの[illegible]
大切

一 老ハ[illegible]
[illegible]不定ようして中[illegible]
老を[illegible]
中[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 [illegible]の日より思ハ[illegible]
[illegible]中[illegible]
一 神祇の日をハ[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

それはかはらぬ法に仏道候きし
御修行して仏道成る候き晴え乃
日をむすびて影を九宮は花の本に占
情を言ふに有候し
れば人まこと影を十分候きし古人を出すは
家古より老人を惜ぬいかし思合の道歌
数多の御なりしに家内し是文に悪しきよは来
へる所へる数より出たし文山候し抑これ家内を
かえり見て更に船にかへる御郷は道る候ずれ上手後
去月に
是をはなくきよをかり旅人

此月両月の御に旅は数より出たし此人の御には
人はかり候月は候りしいふれ場体にすしは
此修を中すかはりして八上すの有候りた神明
佛法のかこみれいへる候き物
行業の是候にかりかり候草根
此就修候を田修かき人明道すり道歌し草根は
うきよのかれは数に如を里を作んとふこそ
こかれいつの日道かん草根せんと称しか行は道て
れ去はし里を作れ仏道候し旅はえんの中しれ見人
えん候し
草ちとは祢やの門より山にこえて

草中より石をひろひ山路の勾ハいまゝ淵にき
ぬ又ゝこゝ瀬をすゝ——雖ゝいくゝいくゝ歩を
引とゝ雲霧のゝ中を漕伝ゝ所——又船の行をそ
ゝ泊くとゝ永ゝゝ所ゝ漕ゝ船の高のゝ
いゝゝ淵ゝゝ瀬ゝゝ船ゝゝて大切し
却ゝて淵の深ハ大ゝ船ゝ舵ゝ心ゝ所——

一 ゝ言ゝ此方の景色ハいゝゝすゝゝゝて四方の空
ゝゝ油をぬゝし山ゝ流ゝ海ゝ梅雨ハ雲——
時ゝ雨ゝゝゝゝ夕ハ我ゝゝきゝ世をゝれていつゝ
ゝ夏の夕ゝ——

一 喝食ハ四方のかゝあゝんゝ[illegible]

歌ゝゝゝゝ——却ゝて景色ハ[illegible]
世懷の形ゝ面白きゝハ稀ゝし強ゝ言ゝゝゝゝゝ
先一ゝすゝハ嘆ゝ——ゝ勾めをゝすゝ心ゝて[illegible]
なゝゝゝゝゝ又能ゝて此情ゝ[illegible]

妹のかゝめの富士の[illegible]
秋ゝゝ萩のゝゝ花ゝ[illegible]
とゝゝゝれゝゝ前勾の[illegible]ハ先ゝ妹のかゝゝの富士の
所をゝゝゝゝゝゝゝ心ゝ何ゝ及ぬゝ[illegible]ゝ彼勾ハ唐
の中ゝゝ連ゝ深ゝゝ後——又此の[illegible]
立ゝ所此情ゝ[illegible]ハゝ高ゝゝ[illegible]ゝく
ゝゝ——いゝゝ萩ゝ富士ゝ[illegible]

又京れの春きハいつし空屋敷にてんを寄す
屋一間の家今年あて仕ハ百日
すもしん〻ハ侍公園何うま歌人へ〻
ゐ一又上るのゐれとも勾無よ寒遠の勾ゐ一
乃去年勾寄勾すこ合て乃れハんゐ一年し
下るの勾ハこもくくたゐ一へを松ゐて
さ世の浦恨ゐ一何をつて可屋て寄ゐ
恨よ勾ゐ一市て遠去よ文ゐ一ゐくく
て勾すす屋一

一 為雨村(時)雨ハ物の内に月を入の御立へ一
もゐ雨ハいゐ一月ゐえて

村一ゐれとて月を出やゐき
一 ゐ主ハ唯今を物の上思へとゐいつのゐ上ゐ
とゐ山ゐ屋一

ゐ主のゐうさゐ市の月出て
一 月よ寒てといゐ勾能くゐ勾すれハ文よ月の感を出ゐ屋一ゐ一く
みゐゐゐハ就のゐもゐ月よ寒て
又時ゐ主て月をゐれハゐ古万古のゐゐい出ゐとゐ
山居いてハ月をゐ一ゐすへ一社西四郎
ゐゐ屋一ゐ勾ゐ一
詠ワいゐ秋ゐ外の春ハ

世を山ごもりやすらん

一五月雨は晴るるこゝろの月のかきくもりを人ゝ――今

五月雨は雲ゝこゝを晴るるかな

いつ降るを雨はうしゝ思えゝ但忘れぬ時雨きぬ

はの雨をたれの風をたれ待ちかねて今宵

時はいとく物忘れそのゆるれる

一春の夜の月は霞を感ずゝ――有ゝ

照らせばこそ雲はなけれ春の夜の

朧なる月ゝ春なるなるなり

月は沈まるゝ春の匂ひ沈まるゝ

月は吹ぬるゝ春但初雪の降ゝ――

一雲の夜の月は涼を感ずゝ――又雲の夜の月は

一雪の夜の月は空を感ずゝ――月の氷ゝ月は

一冬の夜の月は空を感ずゝ――月の氷ゝ月は

なれ玉又光の冷ゝて鏡の如ゝ月を見ゝ毎月

ゝ月ゝ初ゝの如ゝ月を見ゝ――

方丈の物ぬれは待ゝ――

空を感ずゝ

一庭上三のゝ完ゝ――四季を八初見のゝ行ゝ

秋は来ゝ――五年ゝ六年の初見は老を芳を

今更ゝ――七十八十九十ゝ八ゝ

秘さめたかしく付侍まし
秘さめすれハさなる句の花なりて
付る句作なきハ秘蔵と申ハ付ても句の執心
し侍るべし　句合も其作侍るべし

一 発句等をなさん人ハ道理のことわりを可知也
前句の出所をよく見て連歌を考て作侍るべし
上手ハ安くなすもの也
さらぬ時有ける梅の木のうたに
語しなむ人ハちらぬ花のけ
うき人の縁なりハしれぬハし
作者ハいそかぬ人をこのむ也

本の発句ち所 麻芝の山より下
相楽のうけを月成 雪きえて
付句とも其の句にて八句 初心の人の句成
十方へ付さ世んとて也 梅花句とも其
山ぶきの句しの上り一句哉て
鳥もよく句よく人の思ふ成ん
其ハ則こそより連歌とこそなれ
是ハ安き句にして面白きり

一 表句にて面白くも付けの点字みて表句
まり句多し　其ハ
初心よりこれを好ハよくし侍る也

是等ハ見えぬ句にして中々よく付る事安からねと
其儀なくしてハ叶ふへし 幸ひ源氏川の流と
数をかすへし たとへハ三句めを聞みて付へし
二句眼にて志るへきハ三句めを耳にて付へし
連歌ハ花鳥の境を知る事緒にて侍れし 又三句に
四句に至る所まてハ下の句の志るとをし 又二句中
すこき句なとハ三句めを志るし 能くしてうまるや
二句めの御身のうちハ毎句見え候し いかれる花
すなきし人見え人にけ候を能くして春ハ花
の如みて月を壽し 秋ハ月のおもて花を消と
秋とはしても來の家の志されたる事也ニハ秋の花鶴

をかしく心を知る年月を送りぬ 又年月を心
志れとも日数をおくりける事のよしくりたる御
しられ申て志ふの連歌にかなふ能く稽古何度
候へし
一 開より其句まて二千度見ゆる所作にて付れ見え名を
付れハ勝へし 一切見捨何ゐ候へきし
一 花の花紅葉の花ハ心ゐしまれ知れ花山かつ
とり見ゐりとすへし 是二つ付候の大事なれ
一 夏ハ梅雨にていちゝき山また山と思ふ候へし
冬の田の細にのくまて心とけて稽古まてる
候きゝ越し

一　京都をハいとまもなくて又ハ信州へ
又ハ見ハ強て云て見但我ハ今時ハ如何ハ
んハ云て我儘と事を度り相考て云上
口ずさみを云て高山の上ハ云ハ云ハ云
一　人無て世上行を行ハ物ハ仏ハ
後の世上行をうへ行ハ行ハ
一　連歌と句法俳諧といふ
人の道をきわめきすを
ふくきとし　道をわて
うもはしてうう行
一　俳諧と句ハ俗の
の方の相ひとして俗
の上ハとして
の又五ハ五文字
俳して
一　京都の連歌ハ初一会
又ハ俳諧　連歌の句
思ふ　我の句
一　句をうの
連ハ場し
けかのんて
大文山
の方の相ひとして俗
の上ハとして
の又五ハ五文字
俳して
一　京都の連歌ハ初一会
又ハ俳諧　連歌の句
思ふ　我の句
一　句をうの
連ハ場し
けかのんて
大文山

[illegible]

[illegible]

一 詩を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

し
東来のしハ　思ふ也し　こゝ例也しとし
読り入し　如此也し
立消り雲や霧ま日ぬいりして
皆しやハうしろふんかしすりし　中のやハやとおき
なれて海り白き也し　是外のやハ出てても通ん
也りしん　但是外為例よ
東路や　名残や　三こしちや
一　中の雲作りてても云すりんし
一　日ハ何し哉ハ何しかしら云五文字なりてと
てとい通ん例しきし　但哉作よりんへきう
一　為和よ三哉作を是け也の例も其口伝之有

一　中古ニ此世ニ至ん名人稀ニ作ん給ハ
いかれとも此例しても例法すかにある也
一　連歌の大事を知る事容易からす連歌者と
して為や
哉和ふ春月のよかし　大ハ消て
是ハ名蛍といふ五文字ハ大かり句かるを大ハ消
てという字みて中しるき為作し　けれ共之ハ
大ハ有ちてとこそ有也けれきえてらしル有ち
てうししてハ古きるりなりし　他准之
一　花の後といふ句ニんニハ立てしル如くし候の掟を
浦ふ也し　又雪を云海り浦ふかりしと

ほとなれども拾ひ集めて手細かに
なほ〻三角をなす（行ひけ書中一巻歌号し
随脳し〻神力高宮の上にあらはし彼頭又我
ものぬれい家に拾ひ脳のうちに七孔をのこれ
又加仏すたきもの法華経なり
我父母毎今拾世
常逃二心拾い夜
一切衆生能引導
宮大神者意宇護
神仏の脳拾集り
家上の脳脳拾集り
又も（豊師神し珍約河拾遺拾し昇又をさ色
て拾仏を除侍に色ものし

一主歌大の拾ものしいものを主主又〻拾の光か
尽て代を集を法号すの人主ものしけ拾仏く
していけ色主入ものく大方主拾ものしは
一寄合を拾の拾仏主云は前号出来いを今の中
主拾人拾歌の何を見主て主拾仏八主大る
号也

拾（おふうをさてしくしれ
上の八号主ものを拾て拾主下の八門主歌
かれしうやのものを云て拾主西云
ものし　万拾号を仏て知色きしうやの何き
今八稀し　拾文字出号ものい元拾て拾色

おのつから当合に連歌の趣し当合にかなへる文こと
御座なれは手爾於波なとも相違なくハ皆よろしかるへしや
一 上手ハ心から下手ハ付し二条家に伝来れり
けうりと付と詞のさゝへを知る人稀し 当合を知
らして句を作る程に当合となく付たとし句の様
ハ何れ各有へし 前句に交て付くる事也
上手ハ当来を捨て心より来る程にむの伝ふる
全く出来し 又前句の手爾於波に風雅
当合に叶ひれと 句の趣ハとかく何れも付ても海老
上手の句ハ上下手の句ハ付と云事能
一 連歌よりへきほ付出来て秘事也とか

心浅し 第一ハ前句の詞 第二ハ前句の手爾
於波 第三ハ心より伝て けれ共五音なれ
これより伝へん 云意力当合になれは付し
一 前句の手爾於波より付と云ハ前句下の句か
ハ我付れ上の句を次にいひかけて前一句にかり
出て付るかれしに付たるん前句上の句
かハ我先に句下の句の頭に上の句の末をおきて
五十一字にかれ出来ぬ様にいひ下してすへし
根本連歌の上句に付ていえり風といつも連歌に
前といふへき句り此式を上手といひ云へきし
心一にとらかす様に読作し連歌ハ上手と心り

[illegible]

一 [illegible]欲の秘中 [illegible]

[illegible]

[illegible]

心星を[illegible]

又[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

又[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

人々[illegible]

一五 [illegible]の事

[illegible]の星八又[illegible]のこゝろ

[illegible]八月と[illegible]袖[illegible]て

一をさんと[illegible]

[illegible]

[illegible]

遺欲随脳秘伝集 4 金魚伝 宗徒[illegible]

抑此脳秘伝集と申宗徒之極別伝者三七日
金魚と申十七八歳[illegible]童男童女[illegible]中[illegible]
海[illegible]有之八十歳[illegible]翁[illegible]中出[illegible]徒[illegible]高
[illegible]此一冊書留申
其時之[illegible]

伝言の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

連歌仙讃之文

一 年ニ重りしといふ句額ハ花の雪と霞の空に消て
空ハきしく霞ル中ぬ歌の言葉ハ千とせまよハき
風の音空ク星も鶯鳴て梅句ふ御社ニ参り給ふ

一 鶯といふ句額ハ千寸も声を歌ちて志るぬ社
山の色千と茂り御社古今人ハ音せぬおもむき
村竹の歌の色の中梅ヶ香よ本隠すといふ聖上の里
歌の原春の山鳥し下り給ハ

一 蛙といふ句ハ春雨の中吉川のよ梅ヶ薫て又流
水の音ル霞の浮こましく井ノ手の山里寺
こ行より古井の水埋まて何ノ手の井と佗吉の

一 星守の御社下給ハ
霞といふ句ニハ夢のちきりして春ハ知らぬ人より
前来成しき白川吉野ハ真ハ花の言の雅
ありと申給ハ

一 除夜といふ句ハ暮年の暮春の来ルと申達
ほハ旧年ニ行ク年舟しくは除夜の来ルといふ
句ニハ今年ハ又ニ迎ひ行あ行の今年の御志
空ふよういふ歌き申し仲給ハ

一 暮夏梅のきといふ句よ茂り雨山の御社仲ま給門
宗の御ゆてハ春ル言葉そて其山里の御文雅らしき
作ルおき御池のうけ行ま道て花ル字よみ仲給ハ

一漆一きとゝいふ句ハ信濃の結句にて毎年三月
中旬ハ日ゝさゝぬ無山居士ゝ信濃
上州おらて富の村竹上京ハ人和の月袖上
屋て庭ハ夕の雨にて別ゝ作句
一一茶翁ゝいふ句上村柳句ゝ作三月ゝ門ゝ物
妹の寄信て又秋見欲若あて来ゝ人富ちゝを
詠き見の本の中の秋作句
一茶の雨といふ句上蕨句ゝ人毎上作三月ゝ
蕨ゝいふ句上茶句ゝ茶の蕨ハ今ゝ作
茶の雨句ゝ作ゝ屋の聖前ハ富屋ゝ雨ゝ
秋籠上向き秋の夕ゝ世ゝ雨の雨の雨

なりを中行の秋作句
一世表ゝいふ句上明年ゝ表ゝ門ゝ作三月ゝ
ゝ人を待俺ていまゝ望表ゝ
旅舞ゝ主ゝ秋雨上ゝ雨ゝ人口表秋又雨
ゝて月ゝ京の初是佛ゝ作句
一冬山ゝいふ句上茶桔て林の桔主句ゝ作三月
門雨ゝ考妹ハいつの雨ゝ作ゝ西京ゝ表
秋本の下ゝ上月人ゝて海上月雨の雪中ゝ
作句
一初雪ゝいふ句上表作ゝ雨ハ今ゝ作
時雨ゝいふ句上表ハ作ゝ表の作ゝ

一年寄て色の黒くいつかなる
樹の一葉ゑがき物て書のうちに本をきる山の秋
老ぬ云ふ世を捨こそ神のゆかしくな

一夢といふ句に人無に面新鮮なる
無りハ月のもとに所しらぬ人の影
又人に家の内問もなき神かな

一新鮮といふ句に八月松の葉の新鮮なる
人の心も新鮮なる言の葉をけ一ふ人を
故出てゆくりなき山里を一歩の
のゝ外ゝ

一歩といふ句に歩の立てゆくれて
ゆくれん

ゆくれん食ハ人ハ人ハ世に言えて
んをうハ世と思ふ人の我又川人てんをふく
外を捨て者の人ハ人ハ人ハ
一玉章といふ句に萩ハ言ハ
みて飛ハ人の心を人に
ものゝ神の出
一人ハ文に書に言ハ
ものゝ文ハ不ハ口ハ神いきとし
ハ聖山に
ハ文に聖を
ハ世の中の
一人生といふ句に強面を

思ひし捨てをかるゝ身なれど本のまの月の入かたに
ハちゝぬるの花と人をまつ山ぶかなれ
一めゝ原といふ句と車ゝ行かハ行きゝ
ゝ行川おもひ川為うれしく船をして又者ハ
んのうちとうたきて山ゝの林と鶯ゝもり
かゝ立ち花ゝ行ハ
一油の為けきといふ句と雅色の旅人待ワし
めるゝ行ハ行ハゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ハ
ちやすき又ゝ入形色ゝ行ハ行ハ
ゝを思ひ初ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ
一汐船といふ句と海士人ハ海と出ゝ行ハ行ゝ

ゝうきゝうゝ船とゝゝを
ゝ行ゝ行ハ
一通路の言えゝゝゝといふ句と又者ふゝ雅色の船
人毎と行ハ行ハ川人てゝ行ハ船の者ゝ
情又者ハ行ハのたとゝを海ゝ行ハ行ハ
海流ゝゝゝゝゝゝゝ行の船又者ハ
一杖ハの字御きといふ句と必人毎と笠ちて
為ゝゝゝれてゝゝ行ハ金ゝ行ハ行ハ
笠と人を為ゝて又者の星ゝと盛のゝゝ
船ゝ行ハ行ゝ行ゝ海ゝ行ハ
一茶の屋といふ句と人ゝあ旅の為ゝ船ゝ

御上月をんてかく廉一言を行ふもむき仕候

一 那中と上方と清めと定風呂一人毎に銭弐
ツ宛ツ、ゆめき言ふ事一年限りにて
又左の仕方ゑ〳〵ゆ事を行ひて山を考や
ゆと行ふ〳〵と仕候

一 陽分と上方と四いと少を拾ひ左の名ゆ
左の廉分と仕きた行中ゆ三つ九の文に名前
秋上月ゑふれハ者ゑ事ゑ文行月をと
行ふと仕候

一 名の変と上方と郭分ゆ日文に仲をき
無後の代又売の家分ゆ上ハ恨の神者ハ つく上

うゑふ〳〵分ゆ仕候

大はを分ハ仕合ゑて大ゆ
有海ゆきゑていゆゑ位ゑ無ゆ日文ゑて
位ゑ座ふ言ゑ一分ゑ日ふゑ文ゑ
ふゑ月御上めゆ神を仕きて御ル
度ゑ文ゆ仕合ゑすゑ行ゑ歳ゑハ祈ゑ
連歌行ふゑ分ゑ中の法仕ゑ保有ゆ

文政八年四月廿九日

扨一書不思議に縁を結び
遠く二千里を隔て深く功徳を
頂き奇妙に霊験あらたなる
世界を受て孤の名を宣
宝庫の内の
今日未のいとま
矢ヽ亦